

第 32 回電気通信普及財団賞

テレコム社会科学部門 所感

第 32 回テレコム社会科学賞及び同学生賞に多くの応募をいただき有難うございました。テレコム社会科学賞は各種学会への働きかけや募集広告の効果もあり、応募総数は昨年より 5 点増の 32 点でした。また、今回から応募論文の言語を日本語に限定しなかったことから、英文論文 4 点の応募がありました。他方で、テレコム社会科学学生賞はここ数年で減少傾向にあります。学生諸君の多数の応募が待たれるところです。応募論文の内容をみると、研究分野は多岐にわたっています。ソーシャルメディア、インターネット、プラットフォーム、個人情報保護といった問題がさまざまな観点から分析されたものが多いものの、ネットワークエコノミーや電気通信政策に関わる研究が少ないという印象がありました。

さて、本論文賞では受賞作品の選定にあたり、二段階の審査を行っています。そのような厳正な手続きを経て、多数の応募作品の中から今回は、入賞 1 件、奨励賞 3 件を決定いたしました。応募作品の中には、既出の原稿を集めて一冊の著書として出版されたものがいくつかございましたが、章立てや全体の構成が不十分で、章間の重複感であるなど、推敲が必要な作品がいくつかあったのは残念でした。

その中で、審査員から最高点を得たのは、入賞作品「デジタルウィズダム時代へ若者とデジタルメディアのエンゲージメント」でした。本作品の一部は長年にわたるインタビュー調査や観察データをもとに研究成果を集めて著書にされておりますが、全体として構成がしっかりとしており、質的内容がかなり高度で理路整然としていて、通して読ませるだけの魅力がございました。

また今回、奨励賞は 3 点で、入賞作品に匹敵するものもございましたが、いずれも今後の研究の深化の期待度をこめて奨励賞とさせて頂きました。

テレコム社会科学学生賞は、当賞のレベルに達した作品はなかったという残念な結果となりました。グループまたは個人で、新規性、論理性などの面で優れた作品が待たれます。